

児童生徒の友人・仲間関係に対する欲求の検討

武 蔵 由 佳

【問題と目的】

近年、人間関係の希薄化や人間関係形成能力の低下が指摘されており、友人関係で悩む子どもの増加が指摘されている（文部科学省，2010）。また学校現場に生起する問題として不登校、いじめ、中退などがあげられるが、いずれも問題の背景に友人関係の要因が高い割合でとりあげられている（文部科学省，2009）。山本・仲田・小林（2000）は、友人関係に対する肯定的認知が学校享受感に正の影響を及ぼしており、小学生では友人関係をネガティブに認知している場合、不機嫌・怒りのストレス反応を表出し、中学生では抑うつ・不安や無気力のストレス反応を表出することを指摘している。また、大久保（2005）は、学校生活の要因と適応感との関連について検討しており、調査対象となったすべての学校において友人との関係が適応感に強く影響を与えていたことを指摘している。つまり、児童生徒の発達や適応を考える際に友人関係が大きな影響を与えていることが示唆されている。特に思春期から青年期にかけては友人関係を基盤にして親からの自立に向けた取組がなされる時期であり、1日の大半を学校で過ごす児童生徒にとって、友人との関係を形成・維持・深化していくことはどの子どもにとっても重要な発達課題であると考えられる。

Sullivan（1953）は、同性の友人・仲間関係における「親密性」について提起しており、児童期は自分と同じような仲間を求め、遊び友達から受け入れられることを望む「仲間による受容欲求」、前青年期は同性の特定の友人と親密な関係を持つことを望む「親密欲求」があることを指摘している。日本においては、保坂・岡村（1986）が、青年期の友人関係の発達段階として、**gang-group**（外面的な同一行動による一体感などを特徴とする関係）、**chum-group**（内面的な互いの類似性を言葉で確かめ合う関係）、**peer-group**（内面的にも外面的にも互いに自立し、互いの相違性を認め合う関係）の3段階を提起し、同質性を重視した **gang-group**、類似性を確認しようとする **chum-group** から異質性をも受け入れようとする **peer-group** への移行を指摘している。また、榎本（2003）は、友人関係を友人との「活動的側面」と友人への「感情的側面」、友人に対する「欲求の側面」に分け、中学生から大学生までのそれぞれの側面の変化について明らかにしている。その結果、「活動的側面」では男子は友人と遊ぶ関係から互いを尊重する関係へと変化し、女子は友人との類似性に重点をおいた関係から他者を入れない閉鎖的な関係となり、その後互いを尊重する関係へと変化していた。「感情的側面」では変化はあまり見られず、「欲求の側面」では男女ともに

互いを尊重する欲求が学校種の移行に伴って高まっていくことが指摘されている。このことから友人関係は児童期から青年期にかけて学年があがるにつれて、同質性・類似性の確認から異質性の受け入れへと質的に変化しながら展開されると考えられる。

このように同一行動による同質性の共有体験や内面を開示することによる類似性の確認、そして相互尊重に至る異質性の受け入れへという対人関係の取り方の流れの中には、“いじめ”と言われるような集団内の同調行動からの逸脱者に対する否定的態度や大勢の他者に対する同調傾向が潜んでいる（竹村・高木，1988）ことが指摘されている。仲良しの友達集団と均質になりたいという欲求が建設的かつ親和的に同質性や類似性を確認する方向に向かう場合と、他のメンバーの異質性を指摘し、そのメンバーを排除する方向で自分の所属集団との同質性や類似性を保とうとする場合があると考えられる。つまり、元々の友人との同質性や類似性を確認したいという欲求が自分の立場を安定させるために、正当に聞こえる理由をつけて友達を排除してしまうような非建設的な行動に移行させてしまう可能性もあると考えられる。

実際に文部科学省（2013）によると平成23年度のいじめの認知件数は、小学校4、5、6年生では6000件台で横ばい状態なのに対し、中学校1年生で15260件、2年生で10652件、3年生で4899件であり、小学校6年生から中学校1年生にかけて3倍になっている。また、不登校数について見ると、小学校は、4年生3939人、5年生5666人、6年生7522人と学年があがるにつれて1000人ずつ増加し、中学校1年生では21895人、2年生33716人、3年生

39225人と小学生の3倍以上に増加している。この様相は「中1ギャップ」と言われ、要因は生活環境の変化や児童生徒自身の自己認識や学習、教師評価とのズレとの関連など様々指摘されているがその一つとして友人関係もとりあげられている。例えば、小泉（1995）は中学校進学直後の友人関係において同じ小学校出身者がいない場合に困難さを示す、富家・宮前（2009）は出身小学校の違いによる少数派の適応に困難が生じやすい、また友人関係形成能力の弱さがある場合や小学校からのこじれた人間関係を持ち越す場合に困難が生じやすいなどと指摘している。つまり、友人関係が同質性・類似性の確認をする段階で、適切に友達との同質性・類似性が確認できずにいる場合や既にできあがった同質性・類似性の高い集団から異質な存在として排除される場合に、不適応に陥ってしまうこともあると考えられる。したがって、小中学校の学校段階において友人関係に求める欲求は性別（榎本，2003）による差異や、学年による差異（文部科学省，2013）があると考えられる。

本研究では、児童期青年期には友人に対する欲求が建設的な方向にも非建設的な方向にも行動化することを踏まえ、この時期の子ども達が、友達関係に対してどのような欲求を持っているのかについて、性差及び学年差を検討することを目的とした。

【方法】

調査対象 小学校3校の児童924名、中学校2校の生徒807名を対象とした（Table 1）。

調査時期 小学校は2011年10月下旬から11月、中学校は2012年10月下旬から11月に実施した。

Table 1 全調査対象者の人数

		男子 880人	女子 851人	合計 1731人
小学校	4年生	130	129	259
	5年生	188	170	358
	6年生	162	145	307
中学校	1年生	146	131	277
	2年生	131	140	271
	3年生	123	136	259

測定用具 調査対象の児童生徒に、友達関係に関する質問紙として、黒沢・森・寺崎・大場・有本・張替（2002）を用いた。ただし、黒沢ら（2002）ではギャンググループとチャムグループが明確に分化していなかったため、それらは分化しないものなのか、もしくは尺度上の問題があるのか、その点を確認するために新たな項目を加えた。黒沢ら（2002）のギャング・チャム因子とピア因子の10項目に、本研究者と心理学を専攻する大学院生4名、現職の教師1名により検討した5項目を加えた15項目を用いた。5項目とは「友達とスポーツやゲームをして遊びたい」「大人数でわいわい遊びたい」のようなギャンググループに関連する項目、「秘密や悩みを友達にうちあける」「親に言えない心配ごとを友達に話す」「自分の本当の気持ちを友達にうちあける」のようなチャムグループに関する項目である。評定は「4：とてもそう思う」から「1：ぜんぜんそう思わない」までの4件法である。また、友人に親密な関係を求める一般的な傾向を捉える親和動機尺度（杉浦，2000）を同時に行い、本尺度との関連性と妥当性を検討することとした。親和動機尺度は「仲間から浮いているように見られたくない」「誰からも嫌われたくない」などの拒否不安と

「人とつきあうのが好きだ」「友人とは本音で話せる関係でいたい」などの親和傾向の2つの下位尺度がある。評定は「5：とてもそう思う」から「1：ぜんぜんそう思わない」までの4件法であった。

調査手続き 各学校長に調査依頼をし、各校依頼1ヶ月以内の実施を期限とし回収した。調査用紙は本調査が学校の成績に関係がないこと、担任の教師および友達に回答の内容が公開されることがないことを明示した。さらに担任教師には、実施の手順・注意事項のプリントの通りに実施することを依頼し、児童生徒の回答用紙は渡した封筒に入れ、その場で密封してもらい、児童生徒に余計な不安がかからないように配慮した。

【結 果】

1. 友達関係尺度の因子分析結果

友達関係尺度は学校種別に最尤法・Promax回転による因子分析を行った。因子負荷量が.40に満たない3項目を削除し、12項目に対して再度因子分析を行った。固有値の推移と解釈可能性から3因子解、12項目を最終的に採択した。結果をTable 2に示した。結果、黒沢ら（2002）や保坂・岡村（1986）の指摘する枠

Table 2 友達関係尺度の因子分析結果

	小学校			中学校		
	固定した 関係欲求	開かれた 交流欲求	内面共有 欲求	固定した 関係欲求	開かれた 交流欲求	内面共 有欲求
いつも決まった友達と一緒にいたい。	.828	.023	-.048	.743	-.163	.032
休み時間や放課後に、友達といつも一緒に遊びたい。	.609	-.187	.242	.529	.139	.014
グループの仲間どうして固まっていたい。	.801	.058	.012	.812	-.046	-.044
仲間だけにわかる言葉や秘密があるとうれしい。	.675	.162	-.074	.514	.134	.027
いつも一緒に行動している人が友達だ。	.803	-.063	-.055	.560	.039	.008
違う意見をだしあうことで、おたがいを高めあいたい。	.036	.736	.126	.085	.778	-.048
おたがいのちがいを認めあえる仲間がよい。	.004	.803	-.069	.026	.738	.008
考え方が違う人が刺激になる。	-.119	.757	.053	-.072	.698	.080
年齢や性別の違ういろいろな人と一緒にいたい。	.091	.670	-.049	.002	.548	-.044
秘密や悩みを友達にうちあける。	.047	.082	.855	.045	.001	.810
親に言えない心配ごとを友達に話す。	-.008	-.103	.877	.033	-.051	.853
自分の本当の気持ちを友達にうちあける。	-.039	.083	.828	-.054	.040	.885
α 係数	.809	.734	.826	.774	.886	.776
内面共有欲求	.383			.258		
開かれた交流欲求	.268	.304		.239	.340	

組みとは異なるため、項目の内容から新たに因子を命名することとした。小学校の第1因子は、「グループの仲間同士で固まっていたい」などの項目が高い負荷を示し、「固定した関係欲求」の因子と解釈した。第2因子は「考え方が違う人がしげきになる」などの項目が高い負荷を示し、「開かれた交流欲求」の因子と解釈した。第3因子は「秘密や悩みを友だちにうちあける」などの項目が高い負荷を示し、「内面共有欲求」の因子と解釈した。中学校も因子のまとまりは同様で、第1因子が「固定した関係欲求」、第2因子が「開かれた交流欲求」、第3因子が「内面共有欲求」であった。因子分析の結果をもとに構成した各下位尺度の信頼性係数は小学生が

「固定した関係欲求」が $\alpha = .809$ 、「内面共有欲求」が $\alpha = .826$ 、「開かれた交流欲求」が $\alpha = .734$ であった。中学生が「固定した関係欲求」が $\alpha = .774$ 、「内面共有欲求」が $\alpha = .776$ 、「開かれた交流欲求」が $\alpha = .886$ であった。よって、友達関係形成欲求尺度の信頼性が確認された。

2. 友達関係形成欲求尺度と親和動機尺度との相関

友達関係形成欲求尺度の3つの下位因子と親和動機尺度（杉浦，2000）との関連を検討するために、相関係数を算出した。結果をTable 3に示す。小学生，中学生ともに、「固定した関係欲求」と親和傾向（ $r = .474$ ， $r = .433$ ）お

Table 3 友達関係形成欲求尺度と親和動機尺度との関連

	小学生		中学生	
	親和傾向	拒否不安	親和傾向	拒否不安
固定した関係欲求	.474 ***	.464 ***	.433 ***	.454 ***
内面共有欲求	.460 ***	.269 ***	.495 ***	.063 n.s.
開かれた交流欲求	.580 ***	.312 ***	.544 ***	.099 n.s.

よび拒否不安 ($r = .464$, $r = .454$) と有意な中程度の正の相関が見られた。また、「内面共有欲求」は親和傾向 ($r = .460$, $r = .495$) に、「開かれた交流欲求」は親和傾向 ($r = .580$, $r = .544$) に有意な中程度の正の相関が見られた。したがって、「固定した関係欲求」は親和傾向と拒否不安の両方と関連していることから、いつも同じメンバーと一緒にいたがる児童生徒は関係拒否に対する不安や防衛的な心性を同時に持つと考えられた。さらに、「開かれた交流欲求」、「内面共有欲求」は親和傾向とのみ関連していることから、親和傾向にはこれらの2つの欲求が含まれていることが明らかになった。

3. 友達関係形成欲求尺度の男女差と学年差

友達関係形成欲求尺度の3つの下位因子と性別、学年との関係を検討するために、各因子について性別 (2) × 学年 (6) の分散分析およびLSD法による多重比較を行った。第1因子「固定した関係欲求」は、性別、学年の主効果が有意で、交互作用も有意であった。交互作用が有意であったので、性別、学校段階のそれぞれで単純主効果の検定を行った。性別の単純主効果の検定では、中学1、3年生の学年において男子が有意に高い得点を示していた。学年の単純

主効果の検定では、男子、女子いずれにおいても有意で (男子 $F(5, 874) = 2.70$, $p < .02$, 女子 $F(5, 845) = 5.51$, $p < .0001$)、多重比較の結果、男子においては $6 = 5 = 2 < 1$ 年、 $6 < 4$ 年で、女子においては $2 = 3 < 4 = 5 = 6$ 年、 $3 < 1$ 年であった (これ以降、多重比較の結果、学年の群間にみられた有意差は不等号 (<) で、有意差がないことは符号 (=) を用いて表す)。第2因子「内面共有欲求」は、性差、学年の主効果が有意であった。女子が有意に高い得点を示し、また $4 = 5 < 6 = 1 = 2 = 3$ 年であった。第3因子「開かれた交流欲求」は、性別、学年の主効果が有意であった。女子が有意に高い得点を示し、また $6 = 1 = 2 < 3$ 年であった。結果を Table 4 と Figure 1～2 に示した。

このように、男女別には「固定した関係欲求」のみ男子の得点が高く、特に小学4年生と中学1年生でその傾向が高くなることが明らかになった。「内面共有欲求」は女子の得点が高く、特に小学4、5年生よりも小学6年生、中学1、2、3年生で高いことが明らかになった。「開かれた交流欲求」は女子の得点が男子と比較して高く、特に中学3年生は小学6年生、中学1、2年生と比較して高いという特徴が示された。

Table 4 友達関係形成欲求尺度の学年と性別の二要因分散分析結果

	小学校						中学校						主効果		交互作用		
	4年生		5年生		6年生		1年生		2年生		3年生		性差	F値	学年差	F値	F値
	男子	女子															
固定した 関係欲求	14.85 (3.30)	14.50 (3.90)	14.15 (4.90)	14.55 (4.39)	13.75 (3.45)	14.39 (3.10)	15.06 (3.02)	13.99 (3.08)	13.99 (3.51)	13.42 (3.75)	14.20 (3.50)	12.75 (3.23)	4.99 *		4.37 **		3.56 **
内面共有 欲求	7.02 (3.64)	7.66 (2.81)	6.78 (2.87)	7.98 (2.64)	7.34 (2.54)	9.01 (2.45)	7.64 (2.59)	8.93 (2.51)	7.58 (2.62)	8.77 (2.59)	7.78 (2.88)	8.67 (2.40)	76.29 ***		7.93 ***	4, 5 < 6, 1, 2, 3	1.21 n.s.
開かれた 交流欲求	11.59 (4.25)	12.33 (3.52)	11.41 (3.91)	12.25 (2.66)	11.43 (2.66)	12.03 (2.33)	11.64 (2.39)	11.39 (2.25)	11.68 (2.43)	11.61 (2.38)	12.20 (2.80)	12.29 (2.41)	5.32 *		2.06 †	6, 1, 2 < 3	1.85 n.s.

() 内は標準偏差。 ***: $p < .001$, **: $p < .01$, †: $.05 < p < .10$

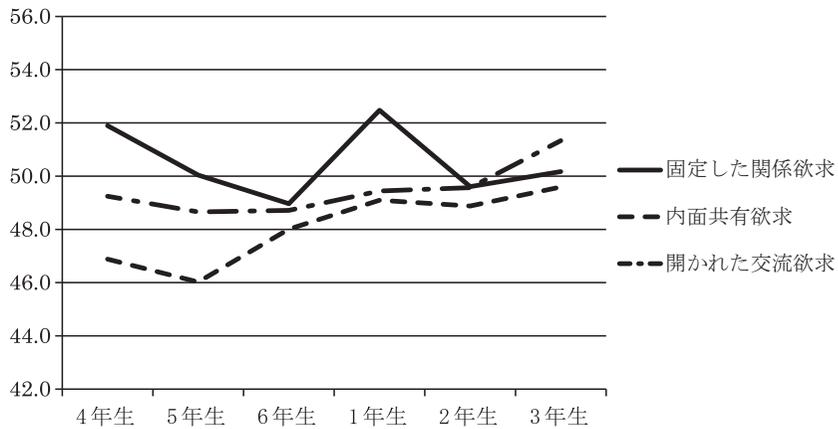


Figure 1 男子の得点変化

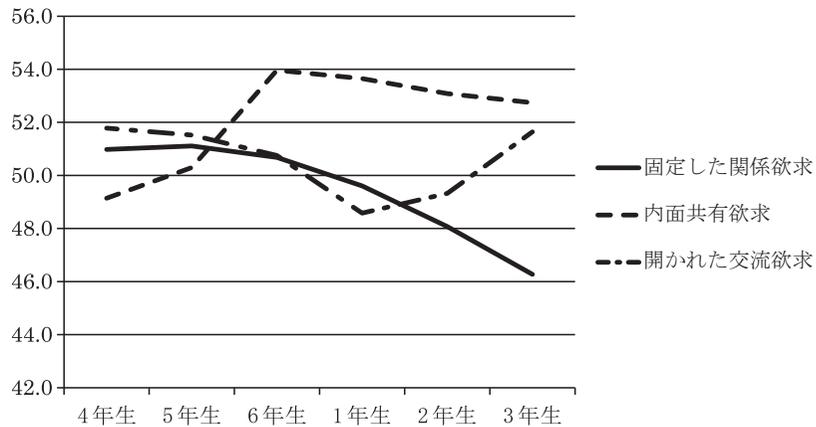


Figure 2 女子の得点変化

【考察】

1. 友人関係形成欲求尺度と親和動機との関連

本研究において、「固定した関係欲求」「内面共有欲求」「開かれた交流欲求」の3因子が抽出された。他者を入れない閉鎖的な関係を求める際の行動面における特徴を示したものが「固定した関係欲求」であり、他者との心理面における深まりを求めるものが「内面共有欲求」であると考えられる。さらに、様々な他者と関わろうとする欲求が「開かれた交流欲求」である。さらに、小学生、中学生ともに、「固定した関係欲求」と親和傾向および拒否不安に関連が見られた。したがって、いつも同じメンバーと一緒にいたがる児童生徒は他者と親しくなりたいという動機と、関係を拒否されるのではないかという不安や恐れも同時に併せ持つことが示唆された。このことから、固定した関係欲求が建設的かつ親和的に同質性や類似性を確認する方向に向かう場合と、自分が排除されないために他者を排除しようとする方向に向かう場合があることが考えられる。また、「内面共有欲求」と「開かれた交流欲求」は親和傾向との関連が見られた。したがって、友人との関係性に関する欲求には、親和動機の拒否不安と親和傾向の2つの傾向が含まれていることが明らかになった。

2. 男女差

男子では「固定した関係欲求」の得点が高く、女子では「内面共有欲求」「開かれた交流欲求」の得点が高かった。このことは友人との「活動的側面」において、男子は友人と遊ぶ関係から互いを尊重する関係へと変化し、女子は友人と

の類似性に重点をおいた関係から他者を入れない閉鎖的な関係となり、その後互いを尊重する関係へと変化するという指摘（榎本，2003）に類似していると考えられる。つまり、男子においては固定した人間関係の中での遊びを通して人間関係を形成したいという欲求が強いと考えられる。しかし、固定した関係欲求は拒否不安とも関連していることから、男子においても友人との遊びの中で関係拒否に関する不安を感じることもあることが示唆された。

次に、女子においては自分の内面を吐露するような関係を求めたり、多様な他者と広く関わりたいという心性が男子よりも強いことが明らかになった。一般的に、女子は閉鎖的なグループを形成する傾向がある（榎本，2003）と指摘されることから、内面を共有したいという欲求を満たそうとすればするほどグループ内に閉じた関係を希求するように周囲から見られる可能性があると考えられる。しかし、女子は様々な他者と関わりたいという欲求も高いことから、実際は男子よりも友達関係における広さと深さの両方を求めていることが推測される。

したがって、友達と親密になりたいという欲求は男子は固定した関係を確認することによって、女子は内面を共有することによって表れると考えられる。

3. 学年差

学年差について見ると、「固定した関係欲求」は、男子は小学校4年生と中学校1年生の得点が高く、女子は小学校4, 5, 6年生と中学校1年生の得点が高かった。友達との集団活動経験を通して、子どもたちは集団を形成するためのルールや人間関係を維持すること、協調性や思

いやり、責任感、集団内の役割などを学ぶ（一前, 2011）とされるが、この時期の児童生徒にとってはある程度固定した関係の中で遊びのような集団活動を通して形成される友人関係が重要であると考えられる。そして固定的な関係を希求するこれらの心性は中学2, 3年生になると相対的に弱くなることが示された。「内面共有欲求」は、小学6年生と中学1, 2, 3年生において得点が高いことが示された。自分の内に秘めている感情を特定の他者に開示したり、互いの秘密として共有したりすることで親密さを深めようとする傾向が思春期・青年期になるに従い増加していくことが示された。「開かれた交流欲求」は、中学3年生で得点が高いことが明らかになった。これらをまとめると、固定した関係を強く求める学年は男子は小学校4年生と6年生、女子は小学校4, 5, 6年生と中学1年生、内面共有欲求を強く求める学年は小学校6年生と中学校1, 2, 3年生、開かれた交流欲求を強く求める学年は中学校3年生ということになる。よって、友人関係は従来の指摘通り、児童期から青年期にかけて学年があがるにつれて、類似性の確認から異質性の受け入れへと質的に変化しながら展開されることが確認されたと考えられる。つまり、「固定した関係欲求」による遊びを通じた外面的な類似性の確認と他者を入れない閉鎖的な関係から、「内面共有欲求」という内面的な類似性の確認の段階へ移行し、さらに、「開かれた交流欲求」という類似性のみではなく異質性を受け入れたり、異質な他者を尊重しようという段階に移行していくと考えられる。したがって、本研究から、小中学校6年間における友達関係に求める欲求の特徴について明らかになった。

4. 討論

本研究より各因子が大きく変化する時期は、固定した関係欲求は特に男子において中学校1年生の前後で、内面共有欲求は特に女子において小学校5年生と6年生にかけて、開かれた交流欲求は中学校2年生から3年生にかけて大きく変化することが明らかになった。

近年の学校現場で指摘されている「中1ギャップ」と関連させて考えると、まずは小学校5～6年生の女子における心理面での同質性の確認と中学校1年生の男子における固定した関係における同質性の確認に配慮する必要があるように思われる。つまりこの時期に、同性の親しい友達がおらず、自らが求める欲求が得られにくい状況にある生徒は友人関係形成意欲が高まらず、友人関係を維持する行動の発現も減少し、適応困難の問題が露見するのではないかと考えられる。また、固定した関係欲求が建設的かつ親和的に同質性や類似性を確認する方向に向かう場合と、自分が排除されないために他者を排除しようとする方向に向かう場合があることを考えるとこの時期の“いじめ”行動についても注意する必要があると考えられる。竹村・高木（1988）が“いじめ”行動の生起の背後には集団内での同調行動からの逸脱者に対する否定的態度があると指摘するように、固定した関係の中で異質な他者を共通の敵として認識し、仲間意識を保とうとすることがあると思われる。これらの予防的な対応が求められるのではないかと考えられる。

石田（2003）は、中学生の交友関係と対人適応感の関連について男女ともに多くの交友関係を有しているほど対人適応感が高くなること、時間経過と対人適応感との関連から、男子では

入学当初にいかにも広い交友関係を形成できるか、その後は親密な関係の形成が重要となってくることを指摘している。また女子では、まず校外でも遊べるような親密な交友関係の形成がまず必要で、その後は少数の仲間関係に収束させず、いかにも広い交友関係を維持できるかが重要となってくると指摘している。したがって、開かれた交流を希求する中学2～3年生の時期を視野に入れて意図的に友人関係形成を支援する必要があるのではないかと考えられる。つまり、男子は中学入学時に近接性のみに頼った友人関係を固定的に維持させる前に、なるべく広い交友関係を築きながらより気の合う仲間を見つけ、深い交友関係へ移行させること、女子は内面共有できる深い交友関係を持ちながらも、その関係に固執しすぎない広い交友関係への移行させることなどである。よって、固定した関係欲求や内面共有欲求を十分に満たすことで自己の安定をはかり、その関係を“いじめ”などの排他的な関係に発展させず、親和的な関係を建設的に維持するための対応のあり方が求められるのではないかと考えられる。

5. 今後の課題

本研究では固定した関係欲求が親和動機の拒否不安と親和傾向の両方に関連しており、それが行動として両面にてでくる可能性が示唆された。よって今後はその背景にある要因について探ることが課題となる。また、本研究は小中学校の児童生徒を対象に検討しており、高校生、大学生の友達関係の特徴は定かではない。したがって、今後はより大規模な対象における調査を行うことで友達関係の発達をより詳細に捉えることが可能になると考えられる。今後の課題

としたい。

引用文献

- 榎本淳子 2003 青年期の友人関係の発達の变化
風間書房
- 保坂亨・岡村達也 1986 キャンパス・エンカウンター・グループの発達の治療的意義の検討 心理臨床学研究, 4, 17-26.
- 一前春子 2011 VI-4 友だち関係の発達, VI-5 ピア・プレッシャー (伊藤亜矢子編著 児童心理学) ミネルヴァ書房 108-115.
- 石田靖彦 2003 学級内の校友関係の形成と適応過程に関する縦断的研究 愛知教育大学研究報告, 52, 147-152.
- 小泉令三 1995 中学校入学時の子どもの期待・不安と適応 教育心理学研究 43, 58-67.
- 國枝幹子・古橋啓介 2006 児童期における友人関係の発達 福岡県立大学人間社会学部紀要, 15 (1), 105-118.
- 黒沢幸子・森俊夫・寺崎馨章・大場貴久・有本和晃・張替裕子 2002 「ギャング」「チャム」「ピア」グループ概念を基にした「仲間関係発達尺度」の開発—スクールカウンセリング包括的評価尺度(生徒版)の開発の一環として— 研究助成論文集 財団法人安田生命事業団, 38, 38-47.
- 文部科学省 2009 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 初等中等教育局児童生徒課
- 文部科学省 2010 コミュニケーション教育推進会議 初等中等教育局
- 文部科学省 2013 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 初等中等教育局児童生徒課
- 岡村達也 2009 発達段階と友だち関係—ギャング, チャム, ピア (特集 友だちができない子) 児童心理 63, 18-23.
- 大久保智生 2005 青年の学校への適応感とその規定要因: 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 教育心理学研究 53, 307-319.
- 杉浦健 2000 2つの親和動機と対人的疎外感との関係: その発達の变化 教育心理学研究, 48, 352-360.

- Sullivan, H.S. 1953 *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: W.W. Norton. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鎌幹八郎（訳）1990 精神医学は対人関係論である みすず書房
- 竹村和久・高木修 1988 “いじめ”現象に関わる心理的要因—逸脱者に対する否定的態度と多数派に対する同調傾向— 教育心理学研究, 36, 57-62.
- 富家美那子・宮前淳子 2009 教師の視点からみた中1ギャップに関する研究 香川大学教育実践総合研究, 18, 89-101.
- 山本淳子・仲田洋子・小林 正幸 2000 子どもの友人関係認知および教師関係認知とストレス反応との関連—学校不適應予防の視点から— カウンセリング研究, 33, 235-248.